グスタフ・マーラー
Gustav Mahler (1860-1911)

交響曲 第6番 イ短調《悲劇的》
Symphony No. 6 in A minor "Tragische"

1. 第1楽章: Allegro energico, ma non troppo. Heftig aber Markig [22:20]
2. 第2楽章: Scherzo (Wuchtig) [13:21]
3. 第3楽章: Andante moderato [17:10]
4. 第4楽章: Finale (Allegro moderato – Allegro energico) [30:05]

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
Berliner Philharmoniker

指揮: ヘルベルト・フォン・カラヤン
Conducted by Herbert von Karajan

録音: 1975年1月、2月、1977年2月、3月 ベルリン

UCGG-9055
480 6433

A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

STEREO
ADD

P.D.

Ⓟ1978
Deutsche Grammophon
GmbH, Berlin

UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ
www. universal-music. co. jp/classics/

Marketed & Distributed by
UNIVERSAL MUSIC LLC
Made in Japan

12・9・26

レンタル禁止

このCDを、著作権法で認められている権利者の許諾を得ずに、①賃貸業に使用すること、②個人的な範囲を超える使用目的で複製すること、③ネットワーク等を通じてこのCDに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。

交響曲 第6番 イ短調《悲劇的》

概説　第５交響曲においてマーラーはペシミスティックな暗さから、明るい積極的解放へ辿ることができたが、第６交響曲は最も深い失望につつまれている。《悲劇的》という題名は、この曲の初演の際に与えられた。「いかなる作品もこのように直接に彼の心情から流れ出しはしなかった」と妻アルマ・マーラーも書いている。「われわれはあの頃ふたりとも泣いた。そのように深くわれわれはこの音楽を感じたのである。第６交響曲は彼の最も個人告白的な作品であり、その上予言的な作品である」。

マーラーがこの作品を1906年エッセンで初演した時、彼の指揮は「ほとんど悪い」といってよいものであった。なぜなら指揮をしている間に彼の感情が限界を突き破ってしまうのではないか、という恐れが彼を強く捉えていたからである。

マーラーはこの曲の第１楽章の第２主題が妻アルマを描くものであると言い、スケルツォ楽章の８分の４拍子との交替するデュナーミクのゆらめきは、砂の上をよろよろしながら駆けていく彼のふたりの子供を示すものだとも言った。

作曲年代・場所　1903年の夏、オーストリアのヴェルターゼー湖畔のマイエルニッヒで始められ、1905年の夏完成。

初演　1906年５月27日エッセンにおける一般ドイツ音楽協会の音楽祭。作曲者自身の指揮。

楽器編成　きわめて大きく、ことに打楽器が大動員されている。フルート５（２はピッコロ持ち替え）、オーボエ４、イングリッシュ・ホルン１、クラリネット４、バス・クラリネット１、ファゴット４、コントラファゴット１、ホルン８、トランペット４、トロンボーン３、テューバ１、ティンパニ（２人）、大太鼓、小太鼓、鉄琴、木琴、トライアングル、シンバル、タンブリン、タムタム、カウベル、ホルツクラッパー（木製のガラガラ）、ハープ、チェレスタ２（またはそれ以上）、弦。

第１楽章　アレグロ・エネルジコ、マ・ノン・トロッポ。イ短調。４分の４拍子。

行進曲風で、暗い第１主題はすでに序奏に暗示されたものである。そのオクターヴ下降やリズム形は、ブルックナーの第５交響曲のフィナーレの第１主題に見いだされ、この交響曲との音楽的・精神的関連を物語っている。この主題は確保されると「激しく、また力をこめてしっかりと」前進する。トランペットの和音が現れる。この動機はこの交響曲全体にわたって重要な意味を持つ。これはイ長調の３和音からイ短調の３和音へ移る形によって作られている。同時にこれは*ff*から*pp*へ移り、全曲のモットーとして、明から暗へ、避け難き運命の圧迫を象徴するものであろう。

この運命動機の響きに引き続き、憂愁にとざされた木管コラールが響き、さらに情熱的な第２主題がフォルティッシモで第１ヴァイオリンに出現する。以上の提示部は繰りかえされる。

展開部は第１主題の再現によって始まるが、第２主題も展開され、行進曲が断続する。やがてチェレスタが天上的な和音を奏し、鈴の鐘も聞こえてくる。すべての運命的な重圧はしばしの間消え、ホルンがコラール旋律を奏し、運命和音も響く。ホルンはクラリネットに受け継がれる。第２主題が出たわけである。しかし不安の嵐は吹き始め再現部に入る。苦闘がまた新しい力をもって始められる。ここでは第２主題が提示部の時より、明るい輝きを持つことが注目される。この楽章の終わりは苦闘の後にくる一時的な勝利であろうが、栄光ある積極的音楽をもって終わる。このコーダは長いので、いわば第２の展開部のような重要性を持っている。

第２楽章　スケルツォ。イ短調、８分の３拍子。

マーラーらしい怪奇的で、皮肉なスケルツォ主題に始まる。この主題が繰りかえされ、展開されると、第１楽章の運命動機が姿を出す。トリオは、８分の４拍子と８分の３拍子を交互に持つ。このグラツィオーソの旋律はオーボエで示される。このトリオに続く第３部は第１部の自由な再現である。その後に、もう一度トリオの部分が変形されて現れ、民俗的なやすらぎの世界に戻るが、奇矯な音楽が次第に強くなり、トリオ主題のまま静かに曲を終わる。

このスケルツォ部冒頭に書かれているwuchtigというのは、「重くのしかかってくるように」というほどの意味である。

第３楽章　アンダンテ・モデラート。変ホ長調、４分の４拍子。

初演後一時、マーラーはこの楽章と本来の第２楽章とを入れ替えたことがあった。しかしここでは、わずかの例外を除いて新E.ラッツ版によって演奏されている。この楽章でしばしの心のやすらぎを作曲者は充分に味わいつくそうとするかのようである。ヴァイオリンの美しい旋律には、管が加わり、ホルンが牧歌的な旋律を加えていく。中間部にはカウベルの音が入り、ハープ、チェレスタが加わり、第１楽章の展開部に対応する。

第３部では木管に曲頭の主題が戻り、ヴァイオリンが美しくこれにからんでいく。

この田園的な楽章にも運命動機はしばしば出現して、全体の気分を本当に安定させたものにはしていない。

第４楽章　終曲。序奏はアレグロ・モデラート、ハ短調、２分の２拍子。主部はアレグロ・エネルジコ、イ短調。

規模の大きな序奏はそれ自身の主題を持つ。ヴァイオリンの高音による嘆きのような旋律である。金管が運命動機を奏し、陰気なティンパニのうめきが暗い背景を形作る。次の主部に現れる諸動機が提示される。「魂の向くところすべて、どこも運命によって脅かされている」（レンナー）。金管のコラールもまた死をあこがれる暗さの中に姿を見せる。運命動機が全楽器で*ff*から*pp*へと移り、連音が次第に早まって主部となる。

主部では木管とヴァイオリンがエネルギッシュな第１主題を*ff*で奏する。まもなくホルンがオクターヴの飛躍を持つ第２主題を力強く奏する。

展開部では気分がいったん鎮まるが、序奏の旋律が執拗に現れ、第２主題も力強くこの演奏に加わる。その頂点でハンマーが叩かれる。次には主として第１主題と第２主題とが展開される。ここでもその最高潮でハンマーが叩かれる。第３の部分は全曲のクライマックスで、それ自身大規模な漸強となっている。運命動機の和音のところで、３度目にハンマーが叩かれる。「英雄は敵から３回攻撃を受け、３回目に木の倒れる如く倒れてしまう」とマーラー自身言った。再現部はきわめて短く、すぐにコーダがくる。イ音のオルガン・ポイントの上に運命動機の和音が響き、すべての力は破れ、死への諦観によって曲は終わる。

行進曲風のリズムは、第１楽章にも第４楽章にも、かなり支配的である。第１楽章では運命に対する反抗心に裏づけられていたが、第４楽章ではむしろ運命の重圧として現れてくる。

渡辺　護

ヘルベルト・フォン・カラヤン

20世紀を象徴する不世出の大指揮者。1908年４月５日ザルツブルクに生まれる。ピアノの神童の誉れ高く、16年生地のモーツァルテウム音楽院に入学、26年ウィーン音楽アカデミーに移って正式に指揮者に転じ、29年１月にザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団を指揮してデビュー、３月にはウルム市立歌劇場における《フィガロの結婚》でオペラ・デビュー、35年同歌劇場音楽総監督に就任。37年ウィーン国立歌劇場デビュー、38年４月８日初めてベルリン・フィルハーモニー（以下BPO）を指揮、９月にはベルリン国立歌劇場における《フィデリオ》で「奇跡の人」と呼ばれるほどの空前の成功を収め、それをきっかけに同年ドイツ・グラモフォンへ初録音。

45年のドイツの無条件降伏によって指揮活動を停止されたが、47年10月復帰、48年英EMIの大プロデューサー、W.レッグが創設したフィルハーモニア管弦楽団の首席指揮者に迎えられ、60年まで同オーケストラと大量の録音を行い、世界的な知名度を得た。48年ミラノのスカラ座、51年バイロイト音楽祭にデビュー、オペラ活動も本格化する。54年４月単身で初来日（88年までに通算11回）、55年BPOの芸術監督・常任指揮者に就任、亡くなる直前までその任にあった。56年ザルツブルク音楽祭、57年ウィーン国立歌劇場の芸術監督に就任、同年11月BPOと初来日（通算９回）。59年ドイツ・グラモフォンと専属契約を結ぶ。同年ウィーン・フィルハーモニーと世界楽旅、この時に同オーケストラとただ１回の来日。

67年ザルツブルク復活祭音楽祭、72年にはザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭を創設して芸術監督に就任、69～71年にはパリ管弦楽団芸術監督も兼任した。この60年代末から70年代の10年間が、「帝王」と畏敬されたカラヤンの最盛期とされる。ベルリンとザルツブルクにおける精力的な活動、77年にはウィーン国立歌劇場にも復帰して、「カラヤン美学」と讃えられた比類ない芸術を確立する。特筆大書すべきこの時代の功績は数多いが、何より重要なのは、音楽は経営者・指揮者・演出家・歌手・オーケストラから成る総合芸術である、という理想を実践すべく自ら統括者となったことだ。さらに最先端の音楽テクノロジーを誰よりも積極的に取り入れ（生涯を通じてだが）、69年に最初のビデオ・ソフトとして《カルメン》を制作、また70年代末からデジタル録音もいち早く認めるなど、「瞬間に消滅する音による芸術」をより忠実に、そして永遠に再現することに尋常ならざる情熱を注いだことも、偉業と讃えられよう。

82年の「ザビーネ・マイヤー入団事件」からBPOとの不和が噂されはじめ、紆余曲折を経て、89年４月23日ウィーン・フィルハーモニーを指揮（最後のステージ）した翌日、BPO辞任を通告、その３ヵ月後の７月16日、ザルツブルク近郊アニフ村の自宅で心不全のため急逝、81年の栄光の生涯を閉じた。

近藤憲一

ADD
Recording: Berlin, Philharmonie, 1&2/1975, 2&3/1977
Executive Producers: Dr. Hans Hirsch, Magdalene Badberg
Recording Producers: Hans Weber, Cord Garben
Balance Engineer: Günter Hermanns

EMIL BERLINER STUDIOS

DSD Remastered by Emil Berliner Studios, 8/2012

■ユニバーサル ミュージック携帯サイトへのアクセス方法
◇iモードをご利用の方　メニューリスト⇒映画/音楽/アーティスト⇒音楽情報⇒ユニバーサル ミュージック
◇EZwebをご利用の方　au oneトップ⇒メニューリスト⇒音楽・映画・芸能情報⇒レコード会社⇒ユニバーサル ミュージック
◇Yahoo! ケータイをご利用の方　メニューリスト⇒芸能・映画・音楽⇒レコード会社⇒ユニバーサル ミュージック
■ユニバーサル ミュージックのホーム・ページ　http://www.universal-music.co.jp/

取り扱い上のご注意●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。
保管上のご注意●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●ジャケットや付属の投込み類が変形したり変色しないよう注意して下さい。